



すすむじ

Vol 6 No. 3

倉敷昆虫同好会

Nov. 1957

目 次

作東の蜻蛉類 Ⅱ	安 東 瑞 夫	1
岡山県にも発見されたヒロオビミドリシジミ.....	青 野 孝 昭	7
奥津附近の蝶類について.....	風 早 保 男	9
クロツバメ観祭 Ⅱ	赤 枝 一 弘	10
ヤブヤンマ・オナガサナエ倉敷に多産か 「夏休み科学作品展示会から」	友 野 良 一	10
おとしぶみ		
勝山にラミーカミキリ	船 越 俊 平	11
半田山の昆虫二・三	松 井 俊 公	12
金甲山でヘリグロベニカミキリ.....	小 野 洋	13
金甲山のシロヘリツチカメムシ.....	小 野 洋	13
向州でアヤナミカメムシを記録.....	赤 枝 一 弘	13
西大寺産すずめ蛾追加	赤 枝 一 弘	13
金甲山にヤブヤンマ	友 野 良 一	14
龍の口でオジロサナエを記録.....	赤 枝 一 弘	14
岡山市でタカネトンボ	友 野 良 一	14
第三回採集会報告		14
編 集 後 記		14

作東の蜻蛉類

安東 瑞夫

Odonata of Eastern Mimasaka, Okayama prefecture, Japan. II

By MIZUO ANDO

§ II 目 録

Order ODONATA 蜻蛉目

Suborder ZYGOPTERA 均翅亜目

Family CALOPTERYGIDAE カワトンボ科

44 *Mnais strigata* SELYS

カワトンボ

色型に就ては未調査であるが二型を産し、山地には透明型が多く、平地には橙色型が多産する傾向がある。

45 *Calopteryx cornelia* SELYS

ミヤマカワトンボ

山地の溪流に産する普通種である。

46 *C. virgo japonica* SELYS

アオハダトンボ

平地の流水に産するが余り多くない。

47 *C. atrata* SELYS

ハダトンボ

平地の流水に極く普通である。

Family AGRIONIDAE イトトンボ科

48 *Aciagrion hisopa* SELYS

ホソミイトトンボ

熱帯系の極く体の細長い種類で、各地に極めて普通である。成虫越冬した個体はホソミオツネイトトンボと同様出現と共に体は水色に變じ4月頃から水田に多数発見されるようになり、産卵を終えた個体は6月中に没姿する。そして殆んど時を同じくしてこれより稍小型の体の地色が青緑色の個体が羽化し初め、9月初旬に至つて越冬型のForm-bと称せられる個体が羽化し11月一杯発見される。これらの二つのFormに関する充分な知見は未

だ得られていない。

49 *Ceragrion melanurum* SELYS

キイトトンボ

各地の池沼に普通。

50 *Ischnura asiatica* BRAUER

アジアイトトンボ

各地の池沼に極めて普通。

51 *Cercion calamorum* RIS

クロイトトンボ

各地に普通。

52 *C. sieboldii* SELYS

オオイトトンボ

各地に普通。

53 *Copera annulata* SELYS

モノサシトンボ

各地に普通。池沼附近に産し飛翔力は弱い。

54 *Mortonagrion selenion* RIS

モウトンイトトンボ

普通種で湿地、池沼に見られ♀に橙色型と緑色型の二型がある。

Family LESTIDAE アオイトトンボ科

55 *Ceylonolestes gracilis peregrina* RIS

ホソミオツネントンボ

日本の南半分に多い種類で現在の所その分布の北限は太平洋側は岩手県、日本海側は山形県となつてゐるが、当地に於ける分布は比較的少ない種類となつてゐる。

越冬性の種で越冬した地色の褐色の個体は3月中旬頃より出現し、体色は個体の成熟と共に水色に変化し、産卵の為水域へと移動が開始され、4.5月に亘つて交尾産卵が観察される。遅いものは7月に入つてからも発見され、これらの産卵により孵化した次代の成虫は7月下旬頃から出現し初め、食餌のため池畔を離れて山間部の葎林内へ移動しやがて越冬場所に潜伏し翌春に至る。

1950年8月18日、後山中腹の900m附近の溪流上で本種が発見され高地帯へも侵

入していることが確認されたが、県南部に発見されるオツネントンボは未発見である。

56 *Lestes sponsa* HANSEMANN

アオイトトンボ

局所的に産し余り多くない。

57 *L. temporalis* SELYS

オオアオイトトンボ

各地に普通。

58 *L. japonica* SELYS

コバネアオイトトンボ

各地に普遍的に分布し、Gen. *Lestes* 中最も個体数が多い。

§ Ⅲ 各種成虫の出現期に就て

最近蜻蛉類研究の同好者の努力によつて、各地の Fauna が次第に明らかにされつゝある今日であるが、出現没姿期に関する調査は蜻蛉類生態究明上是非各地で試みられなければならない問題でありながら、未だ不十分なまま取残されている現状である。斯かる調査に當つては各種の採集地点、気象因子、個体数の寡多に就ても綿密な調査が望まれる処であるが、ここに於ては出限期間に就てのみ記録をとどめることとし、詳細な点に亘つての考察は次の機会に譲ることにした。

調査に就ては 1949 年より 1952 年の四ヶ年間の資料をもとにして採集乃至目認した記録を各月を暫定的に 1 日～10 日(上旬) 11 日～20 日(中旬) 21 日～31 日(下旬) の如く旬区に分けて整理したもので第 I 表では出現没姿期の略確定したと思われる 39 種類を記録し、第 II 表に於ては、出現期或は没姿期の未確定のもの乃至は双方不明なものを一括して表にしたものである。

第 2 表中の点線の部分は接息していたと思われるが確認し得なかつたことを意味するものである。尙本調査によるサナエモドキ、アオハダトンボ、アオサナエの出現期、アジアイトトンボ、ミヤマアカネの没姿期は略確定したものである。

作東産蜻蛉類出現期間一覧表

第1表 出現期間の略確定したもの

種名	月旬	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12				
		上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
1	ホソミイトトンボ	△	△	△	△	△	△	△	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	△	△
2	ホソミオツネトンボ	△	△	△	△	△	△	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	△	△	△
3	シオヤトンボ								×	×	×	×	×	×	×													
4	フタスジサナエ								×	×	×	×	×	×	×													
5	カワトンボ								×	×	×	×	×	×	×	×	×											
6	シオカラトンボ								×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
7	タペサナエ								×	×	×	×																
8	ダビドサナエ								×	×	×	×	×															
9	コヤマトンボ									×	×	×	×	×														
10	ヤマサナエ									×	×	×	×	×														
11	クロイトトンボ									×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
12	ショウジョウトンボ										×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
13	オニヤンマ										×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
14	ギンヤンマ										×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
15	オオイトトンボ										×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
16	モノサシトンボ										×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
17	ハラビロトンボ											×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
18	オオヤマトンボ											×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
19	オオシオカラトンボ												×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
20	コシアキトンボ													×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
21	ウスバキトンボ														×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
22	チヨウトンボ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
23	オナガサナエ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
24	コオニヤンマ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
25	キイトトンボ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
26	アオイトトンボ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
27	リスアカネ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
28	マユケテアカネ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
29	ウチワヤンマ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
30	ミヤマカワトンボ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
31	ハグロトンボ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
32	オオアオイトトンボ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
33	アキアカネ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
34	ノシメトンボ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
35	ナニワトンボ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
36	コバネアオイトトンボ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
37	ナツアカネ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
38	カトリヤンマ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
39	キトンボ															×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

註 △印は成虫越冬を意味するもの

第Ⅱ表 出現期間の未確定のもの

種名	月 旬																							
	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12	
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
1 サナエモドキ										×	×	×	×											
2 アオハダトンボ										×	×	×	×	×	×									
3 アオサナエ										×	×	×	×	×	×									
4 クロサナエ										×														
5 トラフトンボ										×	×	×												
6 ムカシヤンマ										×														
7 キイロサナエ											×	×	×	×	×									
8 ヨツボシトンボ											×	×	×											
9 モウトンイトンボ											×	×	×	×	×									
10 アジアイトンボ											×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
11 ハツヂョウトンボ											×													
12 オジロサナエ												×	×	×	×	×								
13 タカネトンボ												×	×	×										
14 ミヤマアカネ												×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
15 ミルンヤンマ												×	×	×										
16 コノシメトンボ															×									
17 ヒメアカネ															×									
18 コシボソヤンマ															×									
19 マイコアカネ																×	×	×						

Ⅳ 今後発見可能な種類に就て

採集調査に於て甚だ遺憾とすることは、6月中が当地方の農繁期に当り、筆者の個人的理由により十分な調査が行えなかつたことと、筆者の自宅附近に於ける採集観察が主体で遠隔地への採集が頻りに行えなかつた為、特定の環境に棲息する種類に対して調査が行われていないが、今後の調査によつて次に記す各種の分布が確認され得ると考えられる。

(※印は岡山県内より記録のあるもの)

1. イトンボ科

ベニイトンボ、※アオモンイトンボ ※セスジイトンボ ※ムスジイトンボ

※ダンバイイトンボ

2. アオイトンボ科

※オツネイトンボ

本種は県南部平野地帯の岡山、倉敷周辺に於てはホソミオツネイトンボと混接しているが北部一帯からの記録は現在迄総てホソミオツネで、両種の分布を全国的な分布の概念よりすれば興味ある現象である。

3. ムカシトンボ科

※ムカシトンボ

現在の県下に於ける記録はすべて西北部一帯に限定され他地域からの記録はない。

那岐山、後山、山系の溪流より採集される可能性がある。

4. サナエトンボ科

ミヤマサナエ メガネサナエ ナゴヤサナエ ※オグマサナエ ヒメクロサナエ ヒメサ
ナエ

後二者は山地の溪流に発見の可能性があり、オグマサナエは県南には普遍的な分布を示して
居り、北部一帯にも発見され得るものと思われる。

5. ヤンマ科

シラサヤンマ、ヨシヤンマ、アオヤンマ、※ヤブヤンマ、オオルリボシヤンマ、マルタン
ヤンマ、※クロスジギンヤンマ

本科の生態或は個体数の点から調査が遅れているがヤブヤンマ、クロスジギンヤンマは略確
実に棲息しているものと思われ、中国山系からのオオルリボシヤンマの記録が有望である。

6. トンボ科

オオエソトンボ、キイロヤマトンボ、※ベツコウトンボ ※コフキトンボ タイリクアカ
ネ、マダラナニワトンボ、※ネキトンボ、オオキトンボ

Gen. *Somatochlora* に属するオオエソトンボは最近各地からの記録が散見され当地から
発見の可能性もある。キイロヤマトンボは近似種との飛翔習性に注意すれば発見されると思
われる。尙コフキトンボは県下南部では普通に見受けられるものである。

Sympetrum 属中マダラナニワトンボは近畿地方と広島県（三段峽、八幡高原）の産地の中
間地帯にあり分布の可能性も多分にある。

ネキトンボは今秋岡山市周辺に於ける記録がありタイリクアカネも期待される。オオキト
ンボは目下県下からの正確な記録はないが全国的な分布から見た場合極く稀にでも発見され
るものと思われる。

V 参 考 文 献

主なるもの

1. 中条道夫(1948): 日本産蜻蛉類生態雑記
新昆虫 VOL.1 NO.6
2. 朝比奈正二郎(1948): 越冬する蜻蛉類
新昆虫 VOL.1 NO.9

3. 中条道夫(1949):ホソミオツネントンボに就て
松虫 VO13 NO4
4. 中条道夫(1950):四国の蜻蛉類 (I)
徳島博物同好会、阿波の自然、VOL.2 NO1
5. 朝比奈正二郎(1950):北陸館 日本昆虫図鑑
6. 朝比奈正二郎(1955):信濃蜻蛉誌
東筑摩教育会
7. 朝比奈正二郎(1956):日本の蜻蛉 資料〔5〕
新昆虫 VO19 NO10

(完)

岡山県にも発見されたヒロオビミドリシジミ

菅野 孝昭

岡山県に期待されるミドリシジミの新種と題して、磐瀬太郎氏は本誌3(6)に *Favonius* に未記載の一種があり、しかも、岡山県を挟んだ兵庫県と広島県に同一種かとも思われる *Favonius* sp. が既に記録されていることを記され、岡山県にも分布の可能性のあることを強調して県下同好者の奮発努力を喚起された。又、久松昆虫同好会発行の『ヒサマツ』によれば鳥取県からも既に記録が見られ、一人岡山県のみが分布の空白地帯になる筈はないと思ひ立ち、筆者は小野洋氏と共に本年新見市草間町に採集調査を試みた。

その際、偶然にも筆者によつて採集された *Favonius* sp. 1♀がヒロオビミドリシジミらしく思われ、本誌6(1)に既に新見市草間町産三の蝶についてと題して発表したのが、その後、写真、次いで実物標本による同定を白水隆先生に依頼し、ヒロオビミドリシジミに間違いないとの御返事を頂いたので、改めてここに報告する次第である。

ヒロオビミドリシジミ、*Favonius lativittus* Shirôzu (M S) 1♀(写真参照)

採集場所 新見市草間町草間

採集年月日 22. V. 1. 1956

標本の同定についてはその都度白水隆先生より御懇切な御教示を頂いたが、今後の本種分布調査にあたって非常に参考になる点が多いと思われるので、次に私信の一部を発表させて頂く。

“御同封の写真から判断すれば、ヒロオビミドリシジミ♀(正式には未発表の種)と思われます。その特徴は(1)、裏面中室端の短条は明瞭、(2) 白帯は一般に広く、その内側が強く暗色に縁取られるにあります。この種はカシワに近縁のナラガシワ(一見カシワのように見える)の林に限って棲息するもので、現在判明の産地は山口県、広島県、兵庫県、鳥取県で中国地方に特産する種です。発生期は6月中、下旬頃で7月には殆んどとれません。”

“本種はあまり高い山にもおらず、低山地のナラガシワの林に棲んでいませうので、ナラガシワに注意されると分布の調べも容易と思われるます。”

本種の特徴について、先々号に筆者はハヤシミドリシジミとの区別点で、後翅裏面外角部の橙黄斑を取り上げたが、発表直後、目を通し得たハヤシミドリシジミ原記載によれば、それが無意味であり、ハヤシミドリシジミでは第2室と外角突起上部の橙黄斑が完全に結合した例はむしろ稀であることをここに特記し、又、採集場所について筆者がカシワ、アベマキ、コナラ等の混雑林と記述したラエのカシワの項は現在確信がなくナラガシワであつたろうと思われることも合せて記しておきたい。その後、岡山県中部の御津郡御津町久保より兵坂峠を経て建部村に至る低山地の山道一帯ではすべてナラガシワで、カシワは認められないことを9月30日の採集会で確認した。その生育木の普遍振りはナラガシワが県下に広く分布していることを想像させた。そうすると、ヒロオビミドリシジミも相当広範囲に亘つて分布していることが考えられるわけで、来年度以後の調査が大いに期待される。

なお、参考迄にカシワとナラガシワの簡単な区別点を新昆虫3(12)の食餌植物同定の手引より引用してみると、

- カシワ : 葉柄は長さ5mmより短い。
 新枝は太く淡褐色星毛を密生。
- ナラガシワ : 葉柄は長さ5-30mm。
 新枝は無毛。

と、二つの点が見い出される。

終りに、種々御懇切な御教示を頂いた白水隆先生に深甚の謝意を表すると共に、標本の写真撮影を快諾された風早保男氏、常々御援助を頂いている小野洋氏に厚くお礼申し上げます。

奥津附近の蝶類について

風 早 保 男

7月29日、30日の2日間岡山地学会の例会で奥津附近の地質を探り、化石や動物を採集する会に参加したが、その際ネットを携行したので、採集したものを中心に少しばかり報告します。ウラン鉱で有名な人形峠のすぐ近くの高清水高原(96m)ではジャノメチョウとヒヨウモンの類が相当見られました。ここに登る途中相当お年寄の採集家に会ったが、その人の話では、そこの林の中でオオヒカゲを目撃したのに逃がしてしまつたと残念がつておられました。ここでアサマイチモンジ採集。

30日は泉が山(1209m)に登りました。勢揃いするまでに奥津温泉宿の近くでアオバセセリ1頭採集。泉が山の急斜面に到るまでの山麓は一面のワラビ原に点々草花が見えここでは無数のジャノメチョウの外に各種ヒヨウモンチョウが見られた。ここで採集したものは

1. ウラギンヒヨウモン
2. オオウラギンヒヨウモン
3. ウラギンスジヒヨウモン
4. オオウラギンスジヒヨウモン
5. アサマイチモンジ

急斜面に入ると人のせいよりも高いクマザサでカシワなどの潤葉樹の林になつています。ここで採集したものは

1. クロヒカゲ
2. ヒメキマダラヒカゲ
3. クロシジミ(1頭のみ)

相当の高さになるのでまだゼフィルスが残っていないかと探してみたがミスイロオナガシジミの外は全く見かけませんでした。

頂上附近ではノリウツギが満開であり、その他草本類の花も多く、ヒヨウモンチョウ・モンキアゲハ・ミヤマカラスアゲハなどがとびまわつていました。ミヤマカラスアゲハは採集することは出来なかつたが、他の人が採集した由で個体数は相当多く見かけられました。

以上、もともと昆虫が目的でない登山であり、しかも非常な強行軍で、ひとが休んでいるひまにネットを振るといつたような有機で、時間をかけての採集が出来なかつたので、驚見にすぎませんが、奥津温泉に出かけられる時の参考になればと思つて報告させていただきます。

クロツバメ観察 (2)

赤枝 一弘

食性と移動性と蛹化場所

この幼虫はすこく多喰いである。実際一本のツメレンゲに数頭の幼虫がつくとたちまちにしてその一本を枯らしてしまう。大体にして下の葉から順に皮だけにして行き中には莖に喰い込むのもいて完全に枯らしてしまう。しかも幼虫が成長してしまわぬ内にツメレンゲは喰いつくされる。しかしツメレンゲの群生地と違って当地のように屋上のツメレンゲを食草としているクロツバメ幼虫にとってそれは難問題である。ツメレンゲは瓦屋根のあちこちへぼつぼつと生えている。それ等のツメレンゲへ多分幼虫特有の嗅覚にでも引かれてであるうか、他のツメレンゲへ移動する事は間違いないと思われる。実際シヤーレー内の飼育でも食草が欠乏するとほとんど全部の幼虫は逃亡して居なくなってしまう。この移動は夜の内に行われる。何為なら夏期に於ては特に屋根瓦は太陽熱に照され非常に熱くなっている。移動どころか食草より落下してもそくざに死である。

蛹化場所は長く判らなかつた、食草ではない、といつて屋根瓦の下でもないようだ。所がある日偶然にも屋根のひさしを見た所その板に多数の蛹と羽化殻を見る事が出来た。食草の場所からひさしまで相当ある。これからも幼虫が相当の移動力を持つてることが判る。その蛹は全部黒色型であつた。しかも緑色の地色が褐色に変つてゐる。同時に飼育したシヤーレー内で蛹化した幼虫の大部分は緑色型あるいは中間型になつた事等と考え合わせれば面白い問題であろう。温度か、湿度か、保護色か

ヤブヤンマ、オナガサナエ倉敷に多産か

「夏休科学作品展示会から」

友野 良一

1956. 1. 12. 13. 14 の三日間倉敷市旭町の県立図書館で開かれた倉敷地区生徒児童科学作品展示会を筆者は12. 14の二日間見に行つた。昆虫標本中、特にトンボの項を詳しく調べたところ次の様な事が分つたので報告する。

1) 展示されたものの内、倉敷地方で採れたと思われるトンボの総数は429頭に達した。

2) これを種別に分け多数のものから列挙すると次の様になる。() 内が頭数。

①ムギワラトンボ (72)、②ウスバキトンボ (41)、③ハグロトンボ (39)、
④ギンヤンマ (35)、⑤カトリヤンマ (32)、⑥ハラビロトンボ (25)、⑦マユタ
テアカネ (21)、⑧コシアキトンボ (20)、⑨コフキトンボ (16)、⑩シヨウジョ
ウトンボ (15)、⑪チヨウトンボ (15)、⑫オウシオカラトンボ (15)、⑬オニヤ
ンマ (14)、⑭モノサシトンボ (11)、⑮オウヤマトンボ (9)、⑯ナツアカネ (8)、
⑰リスアカネ (6)、⑱セスジイトトンボ (5)、⑲キイロサナエ (5)、⑳ヤブヤンマ
(4)、㉑ウチワヤンマ (4)、㉒ノシメトンボ (4)、㉓マイコアカネ (4)、㉔コヤ
マトンボ (3)、㉕オナガサナエ (2)、㉖アオイトトンボ (2)、㉗コシボソヤンマ
(1)、㉘コノシメトンボ (1)、以上の27種の他破損の為種名不明のもの若干あり。

上記の結果のうち、ヤブヤンマ (4)、オナガサナエ (2)、コシボソヤンマ (1) が採ら
れているのは注目に値し、倉敷地方には普通に産するのではないかと思われる。なおオナガサ
ナエは上記の他、高梁、阿哲狭、総社市で採られた標本が各1頭づゝあつた。

「附記」 展示されたこれらの標本は、ラベルの全然ないものが半数以上あり、又付いてい
ても不完全か、種名が違つているものが大部分で、例えばウスバキトンボに付けられた
ものでは(シヨウジョウトンボ、ツノトンボ、アキアカネ、ナツアカネ、ハツチヨウ
トンボ、サナエトンボ、オーキトンボ)。と一寸ササマジイかぎり。先生方に一考を
促す。

おとしぶみ

勝山にラミーカミキリ

VI 12 (1954) に神庭滝で採集を行な
つた際、その往路及び帰路で、標題の
Paraglenea Fortanei Saunders ラミ
ーカミキリを5頭得た。標本は5頭共筆者が
保存している。

午前9時頃姫新線中園勝山駅を西へ出て旭
川の橋を渡つた辺りで(5万分の1地形図で
は「勝山」の勝山町三田付近であるが)1頭
得た。滝へ向う途中の右手川岸の植物に静止

していたものである。

午後3時頃帰路再び訪れたところ前記地点
から、上流5~600mまでの間で又4頭採
集できた。やはり静止したものであるが植物
にはつきりしない。ラミーに類したものだつ
たように記憶する。

ラミーカミキリの岡山県産地としては、ず
いぶん北で北緯35°5' 辺りであり、前号小
野氏の文の侵入北限北緯34°50' (広瀬)を

上回るものなので、ここに報告する。

(船越 俊平)

半田山の虫二・三

半田山と云うのは岡山市の北部、岡山大学の裏山で、その植相はどこでも見受ける赤松林にブナ、カシその他小灌木の混生林である。

植相の貧弱な割合に昆虫には恵まれている様である。

1. タカサゴシロカミキリ

本種はタコラ山その他でよく知られているが、June 14. '56、岡山大学裏山にてノグルミより1頭採集す。なお、Oct. 2. '55、阿哲郡神代村上神代にて積薪中より本種1頭採集した。

2. ホホジロアシナガソ *Alcides erro* PASCOE

June 14. '56 岡山大学裏山でトコロの葉上に静止せるものを1頭採集、なほ、July 12. '56 大山にてカエデの1種葉上より1頭得た。近似種カシアシナガソ (*A. Piceus* ROELOFS) は、カシ、クヌギ、クリ等の梢にGallを作る特異の習性があるが、本種は、フジ、ハギの葉を食す由。

3. ナツグミシギゾウ *Curculio alboscute llatus* ROELOFS 大発生

シギゾウ類は名の通り子実に入食生育するもので本種はナツグミの子実中で生育するものであるが、April 15. '56 半田山のナワシログミの赤い子実に群がり、30

分ばかりで234頭を採集、内♀100EX ♂134EXであつた。更に翌日はピーティングネットで数百頭を得たが、先年までは一頭だに発見していたかつたのにこの大発生は不思議である。

ラミーカミキリの新産地

岡山県倉敷市附近は本種は特に著名であるが筆者の郷里兵庫県宍粟郡安富町塩野で July. '56 1頭採集した。

オリーブゾウ (トゲアナアキゾウ)

Hylobius desbrochersi ZUMPTの産地

本種は今日オリーブ栽培上の大害虫として問題になつており、我国特産種である。然るに今もつて野外(オリーブ以外)での生態が掘めなくせ者である。従つて今後の調査が要望されるが、その参考迄に現在までに採集並に発生の認められている産地について記して見たいと思う。

- | | | |
|------------------------|--|-------|
| (1) 高尾山 (東京) | 2♀ May 27. 1917 | } (1) |
| (2) 東京、1♂♀ | May, 1912 | |
| (3) Kodakasa 山 (土佐)、1♀ | June 28. 1930 | |
| (4) 小豆島、(香川)、各地のオリーブ園に | 多敷発生、June. '55. 数十頭を島村オリーブ園より入手、然し最初の発見は不明で各地での発生状況から見て栽植後3~4年の間に発生を見る様で、本島最初の栽植が明治40年(1907)たゞから、恐らく明治末か大正初期と思う。 | |
| (5) 船穂町 (岡山)、 | June. '55. | |
- オリーブ園で発見され問題となつている、

Oct 8, '55. 3 EX の幼虫を採集、
May 29, '56 各 3 EX 採集、本園は
1953年に栽植されたもので3年目に初
めて発生した由。

(6) 金光町(岡山)、オリーブ園に発生を見
ている由、確認していない。

(7) 鳥根、山口、愛媛の諸県にも発生してい
る由、然しその詳細は確めていない。

註 (1): 河野広道: (1934)

日本産 *Hylobiinea* より。

(岡山市津倉町1528)

小林志津野方 松井俊公)

金甲山でヘリグロベニカミキリ

1956年6月10日、児島半島の金甲山
に採集を試みた際、中腹附近で飛翔中の

Purpuricenus spectabilis

MOTSCHULSKY ヘリグロベニカミキリ

1 匹を採集した。本種は山地帯で比較的普通
に見受けられるものであるが、最近は県南の平
地帯における記録も少なからず見られるよう
である。金甲山は案外に植物相も豊で、オナ
ガアゲハ、イチモンジチヨウなどもかなり普
通に採集できたほどである。

ともかく、珍しい記録ではないが、県南
部の新しい産地として一応報告しておく。

(小野 洋)

金甲山でヘリグロ ベニカミキリ

1956年6月10日、金甲山の頂上附近

で *Sehirus niveimarginatus* SCOTT
シロヘリツチカメムシ 1 EX を採集した。県
南部では岡山市、倉敷市などに広く分布する
が、個体数は比較的多くない。新しい産地
として報告しておく。

(小野 洋)

向州でアヤナミカメムシを記録

Agonoscolis nulula Fabricius アヤ

ナミカメムシを1954.9.16(?) 向州

で採集している。日本昆虫図鑑、1950、

北陸館及原色昆虫図鑑保育社によると「本種

は稀な種であるが時に群棲することがある」

とある。筆者が採集当時多数の個体を見る事

が出来たが単に変つた種としか判らなかつた

ので2頭採集しているのみである。本種を同

定くださいました小野洋氏に感謝いたします。

(赤枝一弘)

西大寺産すゞめ蛾追加

15 *Cbphonodes hylas* Linne オオスカ

シバ

筆者の目録に本種が漏れているのを秋山

氏に指摘され気がつきました。まったく筆

者の不注意、本種は普通種

16 *Achuerontia styx crathis* メン

ガタスズメ

1956.8. 大々島、大森、以上二種

を追加いたします。

(赤枝一弘)

金甲山にてヤブヤンマ

1956. VI - 10 採集会で兎島半島の

金甲山へ行つたが、金甲山へ登る途中でヤブヤンマ

Polycanthagyna Melanictera

Selys 1 早を採集した、安東氏によると岡山県に於ける本種の確実な記録はない様である。(友野良一)

記録としては始めてではないかと思う。採集場所は当山(250m)の登り口の溪流の石の上である。当山は他にため池等もあり蜻蛉相は豊富である。最後に本種を同定してください。友野良一氏に感謝いたします。

(赤松一弘)

竜の口でオジロサナエを記録

Lanthus suzukii Oguma オジロサナエを1956. 7. 28 龍の口で採集した、本種は県下では少い種で新昆虫 VO 1.9 NO 10によると後山、英田郡東栗倉村、勝田郡勝火町、吉備郡豪溪等が上げてある。南部の

岡山市内でタカネトンボ

1956. VI - 29 岡山市下石井の山陽

新聞社内で電線に静止したタカネトンボ

(*Soma tochlora uchidai* FOERSTER)

1 早を採集した。本種は安東氏の報文によれば中国山脈一帯に分布する様であるが岡山平野の真中で採れた事は面白いのではないかと思う。本種を同定して頂いた朝比奈先生に感謝します。(友野良一)

第三回採集会報告

去る9月30日、本年3回目の採集会を御津郡の御津町紙工と建部駅間で行つた。当日は運動会等で参加者は少なかつたが天気は薄曇りでコースは申し分なく、安江、小泉両先生も参加されて絶好の採集会となつた。採集品はアブ類の小泉先生、松井氏、青野氏は珍品もありかなり収穫があつたそうである。蝶、甲虫、トンボは何れも時期が悪く少なかつたが、それでもスジボソヤマキは多く各紙とも御満悦の様子であつた。なお山相樹相は良く他の季節も好採集地として期待出来そうだ。

(参加者) 安江先生、小泉先生、青野、小野洋、松井、赤枝、若林、友野、風早共(全員の)

編集後記

寒い冬が訪れて参りましたが、皆さん如何お過ごしでせうか、今夏の研究の整理や後始末でお忙しい日々を送つて居られることと思います。

研究の成果を本誌を通じてどしどし発表下さるようお願い致します。(A)